

江戸時代より

愛され続けてきた豊橋筆

豊橋筆は、江戸時代後期、吉田藩下級武士の内職として広まった。当時は近くの山で馬やイタチ等が生息していたことも筆作りが盛んになった理由の一つである。その後、数々の書道家に愛され、約200年もの間生産され続けた結果、日本三大産地の一つとなった。

1976年に、豊橋筆はその歴史と質を評価され、「伝統工芸品」に指定され、ますます発展していった。

現在は、全国の高級筆の7割を担っている。また、豊橋筆は絵筆も取り扱っており、有名な画材メーカーからの依頼も多い。

# 豊橋筆

嵩山工房

三十六工程の

手作業



毛抜き



毛もみ



練りませ



仕上げ

豊橋筆は、全36工程を全て手作業で行う。複数の毛を使用し、水で濡らしながら毛を混ぜ合わせる「練り混ぜ」という技法は、墨になじみやすく、滑るような書き味が大きな特徴である。

毛によって柔らかさが違い、イノシシの毛は硬く芯として、リスやヤギなどの毛は柔らかく、筆を下した時の感覚をやさしくする効果がある。このように使用する毛は、目的によってその都度職人の手によって作り分けられている。

工房の職人さんは、「値段によって価値が変わるのではなく、その人にとって最も使いやすい、自分に合った筆が一番良い」と笑顔で話されていた。

愛を紡ぐ

宝の筆

Pet Charm

豊橋筆は、書道筆や絵筆だけでなく、ペット筆や赤ちゃん筆のチャームやストラップとしても人気がある。大切な思い出と共に職人の手によって「世界に一つだけの宝物」に仕立てられている。

